
4 . 妄想学園松木とうた

小野チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4・妄想学園松木とうた

【ZPDF】

Z0322Z

【作者名】

小野チカ

【あらすじ】

妄想学園にいる一組の恋人たちのお話。

妄想学園は本日23時まで、一時間一話ずつ公開中

先輩と私は、付き合つて三年になる。

それは遡ること、桜が舞い踊る中学校の入学式。
その頃から暴君と名高かつた外岡先輩のグループにいる、控えめな先輩に私が一目惚れをしたことからはじまった。

「好き」という言葉を三十回くらい言つたところで先輩が、「好きの安売りをしない方がいい」って優しく諭してくれた。

そうだなあ、と思つて、今度は、

「大好き」という言葉を三十回くらい言つた。そしたら先輩が、「大きいを付けたところで、あまり変わらないよ」って教えてくれた。

好きよりも、大好きの方が気持ちがいっぱい込められている気がしたけれど、

先輩には通じなかつたみたい。

だから今度は、

「愛しています」って伝えた。

「気持ちが重い」って言われ続けた。

「結婚してください」って言つと、

「うつとうし」と言われた。

いつも通り休み時間の度に顔を出していた私は、お友達から猛者

と呼ばれていた。

普通は、他学年の、しかも二つも上の先輩の教室に、一人で乗り込むことってすごく勇気がいるみたい。そんなの、先輩を見るだけで毎日幸せな私にとって、障害にもならなかつた。会いたかつたら、会いにいけばいい。

例え男子トイレに逃げ込まれても、体育の前で着替え中だつても。もし妄想学園に入つてた頃だつたら、コル・先生も一緒に覗いてくれたかもしれない。以前覗こうと思ってドアに手をかけた時、コル・先生と手が触れ合つたことがあつたもの。

外岡先輩に“松木のフン”と言われながらも、私はずっと先輩のことを追つていた。

高校だつて、先輩と同じところに行くために、必死で勉強したんだもん。

そんな関係が、一年続いた頃、気がつけば私と先輩は付き合つた。

好きとも、愛してるとも、結婚してくれとも言わなかつたのに、それは突然やつてきた。

入学して、桜が散り、夏が来て、紅葉が色づき、冬が訪れ、新しい年を迎えた。そして、恋人達のイベントの数週間前。

「ねえ、先輩。チョコレート好き?」

「嫌い」

「じゃあ、ココア好き?」

「砂糖入つてないのなら」

「うーん。マシュマロは? 好き?」

「甘いもの嫌い」

「ねえ、先輩」

「なに?」

「私のこと?」

「好きだよ」

「もー、先輩つて好き嫌い激しい……ってあれ?」

聞き間違いかと思って、雑誌から視線を上げると、先輩はいつも澄ました顔だった。外岡先輩といいる時と何も変わらない、笑うと八重歯が覗いて可愛いのに、あまり笑わない先輩。殿は俺様だつて嫌そうに言いながら、すぐ仲の良い、私の大好きな先輩。

「ほんとに?」

「なにが?」

「先輩、私のこと……」

「好きじゃなかつたら、今頃被害届出してる。それくらい酷いつて、そろそろ自覚してくれないかな」

そんな会話からはじまつた私たちの付き合いは、高校生になつても変わらなかつた。

「七不思議？」

お昼の放送を聞きながら……あ、また工藤パパだ。大丈夫なのか、幽体離脱しそぎると、元に戻れないって聞いた事があるけれど。最近よく代わつている気がする。最後のシメが、

「工藤結花と付き合いたいヤツは、この俺を倒してからこいつらー！」
なので、よくわかる。

既に空氣と化している私は、先輩の前の席の人から椅子を借りてお弁当を広げていた。外岡先輩たちもいるけれど、外岡先輩たちにとつて、私がいることは氣にも止めない存在らしい。中学校からずっとここに調子だからなのか、私が先輩のファンだからなのか。

「そう、七不思議。うたは知つてる？」

私の名前は歌歩かほと読むのだけれど、先輩はうたつて言つ。そう呼ぶのは先輩だけ。
だから私は、うたつて呼ばれるのが好き。

「用務員の有働さんが、ウシつて呼ばれてる理由とか？」

「……黒毛和牛からだろ。そんなの、周知の事実だ」

「んー、もり学園長の背がまだ伸びてる」と。

「まじで…？」

「うそだろー！」

先輩と外岡先輩は驚いていないのに、他の先輩達は驚いている。

「うた、それは七不思議じゃなくて、単に朝身長計ったから」

「そうなの？ 髪が元気になつた証拠だつて、もり学園長喜んでたのにね」

つまんないと言しながら、かにさんワインナーをつづく。
フォークの先が手にあたつて、ひとつもげて落ちた。

「七不思議、一年ではまだ聞いた事ない？」

「んー、そんなに話題にはなつてないんだよね。コル・先生が、実は日本語流暢とか、首つりの木とか、丹羽先輩に彼女が出来たとかかなあ」

そう言い終わると、大きなお弁当を持った先輩達が次々に立ち上がる。

先輩と外岡先輩は驚いていないのに、他の先輩達は箸を追つてしまつほど驚いていた。

「許せん、丹羽の分際で！」

「くそ、末代まで呪つてやる……」

「リア充は爆発しろー！」

佐々木先輩が怒りに震えているので、思わずくすぐす笑う。

「やだあ、佐々木先輩。爆発したら飛び散った内臓集めるの大変いやないです。爆発しそうな人みたら、ちゃんとミミ袋でガバーしないと駄目ですね。後片付け楽だし」

「ここにこ言つた私とは反対に、固く口を閉ざした先輩達は次々と箸を置いて座る。
まだお弁当が残っているのに、蓋までしてしまつた。

「うたは想像力が豊かだな」

「そんなことないよ。事実だよー！」

微笑んで頭を撫でてくれる先輩に、私もにっこり笑い返す。

先輩大好き。うざいって言われても、一度死んで馬鹿を直して来いと言われても、優しいし大好き。ずっと、先輩の隣にいたいな。

「……前から思つてたけど、松木が歌歩ちゃんと付き合つてるの不思議だわ」

「俺も同感。松木って俺らの中でも一番普通だよな」

「多分な」

「いや、殿の親友をかれこれウン十年続いている時点で普通ではない！」

声高々に宣言した先輩達を、外岡先輩は笑顔でチヨップしていた。その音が肉同士がよじれる音に似ていて、私はつい樂しくなってしまつ。

先輩達は楽しい。

きっとそれは、私の大好きな先輩のお友達だからだ。

「あれ有名だろ？ 尾野先生の偽チチ疑惑」

外岡先輩が黙々とお弁当を食べながら言い放つ。
食べ方もワイルドな外岡先輩のお弁当は、今日も日の丸だ。 すべて
や。

「よせて上げるだけで、そんなにサイズつて変わるものか？」

「バカ言え。俺、ねーちゃんのブラみて詐欺だと思ったぞ、あのパ
ツドは騙される」

「馬鹿はお前等だ。サイズが変わるんじやない、見た目が変わるん
だ！」

なぜかおっぱい話に火がついた先輩達は、尾野先生のチチには夢

がつまつているだの、希望がつまつているだと、楽しげに話をしていた。

「…………獣も希望もつまつてるわけないじゃん。おかーさんペチヤだし」

「…………ほそりと呟いた一言は、本物だ、半分嘘だと議論している先輩達には届かない。

田の前の先輩は、口元に指を添えて、黙つていなさること田で私を諭した。

尾野 歌歩、十六歳、高校一年生。

「ひやう貧乳は、遺伝しないものらしい。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0322z/>

4. 妄想学園松木とうた

2011年12月1日20時47分発行